

MIRAI

[人と防災未来センターニュース]

[人と防災未来センターニュース]

発行／阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター



Vol.

17

Contents

特集『あの日』と『現在』をつなぐ震災資料展開催	1
米国ハリケーン「カトリーナ」災害調査報告	3
かんたん!わが家の耐震補強	4
人と防災未来センター災害対策専門研修(秋季)等の実施結果	6
研究調査員からの便り	7
河川洪水ハザードマップと神戸市地震津波減災マップを設置	8

特 集

『あの日』と『現在』をつなぐ震災資料展 開催

2006年2月25日(土)に、灘区民ホール(マリーホール)1階ロビーにて、“『あの日』と『現在』をつなぐ震災資料展”を開催し、人と防災未来センターの活動や資料室の資料収集の歴史を紹介しました。当資料室初の「センター外」での展示ということもあり、灘中央まちづくり協議会の方々の協力を得るなど、地域に根ざした内容となりました。



『あの日』 エリア

阪神・淡路大震災における灘地域の写真の展示や当時の新聞紙縮刷版などを展示。来場者は震災時の街の様子や被災地での生活を振り返り、災害の怖ろしさと防災の大切さを改めて実感していました。

また現在の灘地域には、震災後に住民となられた方も多く、身近な地域の震災史に触れるよいきっかけとなりました。

『現在』 エリア

人と防災未来センターが所蔵する復興に関する資料や震災10年を期に収集された『阪神・淡路大震災10周年対応記録』などを展示。震災から現在までの軌跡をたどる内容となりました。

また体験コーナー『災害が起こったときに役に立つ新聞紙スリッパを作ろう!』では、新聞紙でできる簡単なスリッパの作り方を紹介し、来場した子どもたちと実際に新聞紙を使って作りました。





特集

わたしたちの復興プロジェクト



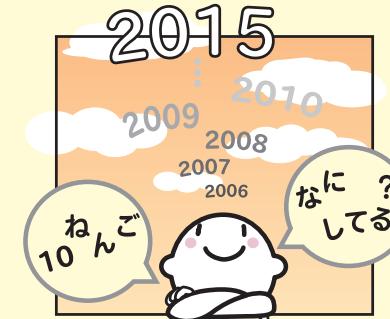
『阪神・淡路大震災 わたしたちの復興プロジェクト』は、GIS(地理情報システム)を利用し、阪神・淡路大震災の記憶・記録を多くの方に知っていただくことを目的としています。今回、展示会場でインターネットを通じて阪神・淡路大震災の体験や震災復興に関する情報を登録、アクセスできる“わたしたちの個人復興史”を紹介しました。またフラワーロードの震災前・震災直後・現在をCGで再現した大画面モニターは、実際に触れて操作することができ、来場者の関心を集めました。

ひと未来館 企画展

10年、ひとのゆめ・みらい

小さな未来展
~それは誰もの中にある~

震災11年目の今年、これまで振り返ってきた「10年」という時間を目の前に広げ、自分自身の未来を描き出してみませんか？ そんな企画展を開催しています。各界で活躍するKOBEにゆかりの著名人や、今年の1.17に本館に訪れてくださった方々に描き出していた「これまでのあゆみと未来への足取り」が紹介されています。そんな心が暖かになる空間で、あなたもご自身の未来を想像してみる特製ワークシート『未来予報 わたしのゆめ・みらい』にチャレンジしてみてください。未来は私たちの足元から広がっています。あなたの 中にある「未来」がきっとみつかりますよ！



2006年1月31日(月)～4月16日(日)
ひと未来館 3F ふれあいステージ

●ご紹介のオピニオン

桑田 結 さん（ブナを植える会会長）
田所 諭 さん（国際レスキューシステム研究機構 会長）
沢松 奈生子 さん（元プロテニスプレーヤー）
菊地 直樹 さん（兵庫県立コウノトリの郷公園研究員）
坂 茂 さん（建築家）
やすみりえ さん（川柳作家）



米国ハリケーン「カトリーナ」災害調査報告



2005年8月24日にメキシコ湾で発生したハリケーン・カトリーナは、8月29日にアメリカ合衆国（以下米国）ルイジアナ州ニューオーリンズ市に再上陸し、ミシシッピ州メキシコ湾岸一帯などに洪水、高潮等による被害を及ぼしました。人と防災未来センターでは、被害から3ヶ月後の現地の状況を把握し、災害対応機関が発災直後からの対応とその課題を聞き取り調査することを目的として、12月10日から18日までの期間、永松伸吾・近藤伸也両専任研究員を派遣し、現地の被災状況と対応状況について京都大学防災研究所及び関係省庁（内閣府、消防庁、国土交通省）と合同調査を行いました。

調査結果概要

- ◆被害の大きさは想像をはるかに大きく、ニューオーリンズ市の堤防決壊箇所の近辺では未だにがれきが撤去されていない場所がありました。同市では、いまだに人口の半分程度が失われたままであり、そのため一部の地域ではインフラの普及すら手がつけられていない状況でした。復興には相当な苦労と時間がかかるものと思われます。
- ◆ミシシッピ州のメキシコ湾沿岸にあるビロキシ周辺では、高潮により建物が倒壊されたまま放置された現場もありました。一方で被害が比較的小さかった地域では、復旧が進んでいました。
- ◆災害発生前の行政対応については、州政府による避難勧告、非常事態宣言やハイウェイの一方通行化などの避難対策や、FEMAによる調整官の現地派遣などおおむね計画通りの災害対応が行われており、大きな問題点はなかったものと思われます。
- ◆しかし、ルイジアナ州ニューオーリンズでの運河破堤とそれとともに大規模浸水については完全にFEMAの想定外であり、通信手段・交通手段の途絶によって災害対応は困難を極めました。阪神・淡路大震災同様、州政府職員、市職員らも被災したことが災害対応をさらに困難にしたようです。
- ◆現地からの一報を受けた際に、このような事態の深刻さについて、FEMAの上層部が正しく認識できなかつたため、事態に対応した特別な対応が後手に回ってしまったものと思われます。
- ◆一方、ミシシッピ州では対照的に、大規模な高潮被害にも関わらず、FEMAによる介入がスムースに機能しているようでした。

※ FEMA: 米国連邦危機管理庁

今後の予定

今回の調査結果を踏まえて、3月には市や行政区など地方政府に重点を置き、初動対応や応急対応をいつ、どこで何をどのような組織体制で行ったのかという視点から再調査を行う予定です。



破堤現場近辺



高潮により被害を受けた建物

かんたん！わが家の耐震補強－明日への備え－

特別企画展「かんたん！わが家の耐震補強－明日への備え－」を防災未来館2階企画展示スペースで開催しました。

阪神・淡路大震災から10年が経過しましたが、新潟県中越地震やスマトラ沖地震の津波、最近ではパキスタンでの大地震など世界各地で大きな地震が発生し、多くの犠牲者が出ています。新聞やテレビの報道で被災地の様子を見て、不安を感じてはいても、今住んでいる住宅の耐震性を気にしている人は意外と少ないのではないでしょうか。古い建築基準で立てられた家屋を災害から守るために、どこをどのように補強すればよいのか、実際の方法をわかりやすく学べる展示を行いました。

展示は3部構成になっており、最初のコーナーは、「倒壊による地震被害の実態を知る」として、家屋の倒壊や家具の転倒などを原因とする死者が全体の9割近くを占めた阪神・淡路大震災の被害状況やこれから30年以内に発生する確率が高いとされている地震の紹介、耐震性に問題のある既存不適格建物（1981年の旧耐震基準以前に建築された構造物）が未だ数多く存在している住宅の耐震化の現状を解説。



2番目のコーナーは、「住宅補強のしくみを学ぶ」として、まず自分でできる簡単な家の耐震診断の方法を紹介。次に住宅の基礎構造と工法、地盤、基礎、体力壁による補強、筋かいによる補強などをパネルや模型などでわかりやすく解説。筋かいのない建物の模型が振動ですぐに壊れてしまう映像は耐震構造の必要性を実感させられました。

また、家具の地震対策については、実物の家具を展示し、いろいろな転倒防止グッズを紹介しました。

さらに、「ひょうご住宅耐震改修技術コンペ」において、既存木造住宅の耐震補強が簡便に廉価に行える工法の入賞作品について、現物も含めて展示紹介しました。

この特別企画展で学んだ知識を実践して、地震などの災害に備えていかないと意味がありません。来館者一人ひとりに耐震化への備えをしていただくため、最後のコーナーは、「行う 耐震化への備え」と題して、耐震補強業者の選定方法や各種公的補助制度などを紹介していました。



ひと未来館ふれあい企画

「食べるということ－みんなでつくろう、考えよう－」を開催しました

あなたは今日、なにをどこで、だれと、どんなふうに食べましたか？「食べるということ」をじっくりと考えたことはありますか？

平成17年9月27日～10月30日の間、ひと未来館3階ふれあいステージで、ひと未来館ふれあい企画「食べるということ－みんなでつくろう、考えよう未来の食－」を開催しました。

今回は「食と自然～めぐるいのち～」「食とひと～こころとからだの栄養～」「食とコミュニケーション～つながりあい～」という3つのテーマから「食」を提案。パネルには作物が育つ「肥えた土」には微生物などのたくさんの生き物が生きていること、よく噛んで食べることで脳が刺激されて内臓の働きが活発になり毎日を元気に過ごせること、食卓は食べるという生きる基本（生きる知恵）を学び伝える場であることなど、「食」にまつわることをわかりやすく解説しました。

また、「野菜くんクイズ」では子どもたちが、ふだん食べている野菜がどのように実るのかを一生懸命考えたり、野菜の豆知識で遊んだりしていました。「お箸で豆つかみゲーム」では、世代を超えて楽しんでいる来館者の姿が見受けられました。また「おふくろの味・ママの味」では、来館者の方にお母さんの味を書いてもらうことで、年代によっての日常の家庭の味の移り変わりなどがわかるおもしろいコーナーになりました。



ひと未来セミナー「食べるということ」3回シリーズを開催しました

ひと未来館ふれあい企画「食べるということ－みんなでつくろう、考えよう未来の食－」の関連セミナーとして、ひと未来セミナー「食べるということ」3回シリーズを開催しました。

◆第1回 10月2日（日）

第1回目は、西村和雄氏（京都大学フィールド科学教育研究センター講師）を迎えて、「食と自然『おいしい作物 土から口まで』－いつ、どこで、どんなふうにできるの？－」をテーマに、私たちが食べている作物がどのように作られたものなのか、作物が大地に実り食卓に上がるまでの“土から口まで”について考えました。

スライドでおいしい野菜や果物の見分け方を教わったり、実際に果物を食べ比べたりすることは新たな発見でした。



第1回セミナー風景

◆第2回 10月7日（金）

第2回目は、坂本廣子氏（食育・料理研究家）を迎えて、「食とコミュニケーション『楽しい食卓 食をはぐくむ』－ほんとうにおいしい食卓って？－」をテーマに“食べることはただ成長のための栄養をとるだけでなく、そのひとの住む風土・文化も伝えてゆく大事な営みである”ということを、未来を担う子どもたちにどのように伝えるかを考えました。

調理を最初から最後まで子どもたちだけに任せてやらせることで、子どもたちに大きな自信を与えることができるというお話はとても興味深いものでした。



第2回セミナー風景

◆第3回 10月15日（土）

第3回目は、鈴木雅子氏（福山平成大学客員教授・医学博士）を迎えて、「食とひと『キレイな食事 心と体と食の関係』－ここに効く食べものって？－」をテーマに偏った食生活が子どもの心身を蝕んでいることや、現代の食事が生活習慣病や精神の不安定をまねきがちであることから、何をどのように食べれば安心なのかを考えました。

キレイやすかった中学生が食事をちゃんとしたものに変えていったことで、だんだんと落ち着いていったというお話は、食事と心と体のかかわりの大切さを改めて知ることができました。



第3回セミナー風景

センターの
活動から

人と防災未来センター災害対策専門研修（秋期）等の実施結果

人と防災未来センターでは、各種の研修事業を実施していますが、今回は、その中から、本年秋に実施された、マネジメントコースとボランティアコーディネーターコースについて、その概要及び実施結果をご紹介します。

1 災害対策専門研修マネジメントコース

(1) 概要

研修事業の中核である「マネジメントコース」は地方公共団体の防災担当職員を主な対象としたコースで、毎年春と秋の2回実施しており、主に管理職を対象としたAコースと、監督職や担当者を対象としたBコースの2つのコースがあります。

(2) 受講者

近畿地方、中部地方、中国・四国地方を中心に北は宮城県から南は福岡県まで全国各地から、116名の参加がありました。



コース別受講者数

マネジメント コースA	第1ユニット	11月 8日（火）～11月11日（金）	21人
	第2ユニット	11月14日（月）～11月17日（木）	23人
マネジメント コースB	第1ユニット	10月11日（火）～10月14日（金）	25人
	第2ユニット	10月17日（月）～10月21日（金）	22人
合計（延べ）			116人

※各コース全ユニット受講者 Aコース：8人 Bコース：3人 ※募集定員は各ユニット20人

受講者に対するアンケート結果からはまず、研修に対する満足度（100点満点）の平均が、88.6点であり、研修内容が受講生の期待に添うものであったと思われます。特に阪神・淡路大震災時の経験者や、河田センター長をはじめとする幅広い情報有する講師の講義が高い評価を得ています。しかし、その一方で「講義時間・意見交換時間が不足している」「演習形式の研修を増やして欲しい」といった指摘もありました。

(3) 今後の方針等

当研修は、センターが開設した平成14年度以降、受講者ニーズを常に把握・反映しながら、これまでに延べ823人が受講し、常に高い評価をいただいています。また、国の中央防災会議等においても、防災関係者の資質の向上を図る研修として位置付けられていますが、開始後3年を経過した今、研修内容をより一層効率の高い研修とするため、これまでの受講者の評価やニーズ、社会的な要請を十分にふまえた上で、次年度のカリキュラムについて現在検討を進めているところです。



2 ボランティアコーディネーターコース

(1) 概要

過去に災害ボランティアに携わった経験を有し、今後、災害ボランティア等でボランティアコーディネーターをめざす方等を対象としたボランティアコーディネーターコースを実施しました。

被災直後の被災者、支援者、ボランティアの経験を追体験するワークショップや「災害ボランティアセンター」の設置・運営とそこでのボランティアコーディネーションについて学びました。講義形態については、ワークショップ形式を活用し、講師と受講者、受講者同士が、意見を交換しあい、相互に情報交換できる機会を豊富に設けました。

(2) 受講者

近畿地方・中部地方・九州地方を中心に全国各地のボランティア団体、社会福祉協議会から、31名の参加がありました。当研修は、本年度で3回目となるものですが、参加者からは「非常に得るところがあった」との意見が多く、全体としては高い評価をいただけたものと考えています。



研究調査員からの便り

人と防災未来センター研究調査員

読売新聞大阪本社地方部次長

安富 信



昨年7月から、防災全般と災害報道の研究のため、このセンターに派遣され、9ヶ月になります。読売新聞記者として採用されて以来26年間、他の会社や機関に出たことがなかったため、当初は、研究調査員としての生活に戸惑う毎日でしたが、最近はようやく、人防での研究生活にも慣れてきました。

この間、様々な経験を積ませて頂きました。とくに印象に残っているのは、10月から11月にかけて自治体職員らと一緒に学んだ研修です。防災・減災の基礎理論から、管理職としての防災マネジメントまで、国内トップクラスの研究者や専門家、ボランティアから幅広い知識を居ながらにして学べるという幸せを満喫しました。この他にもボランティアコーディネーター研修、国家公務員研修などもあり、知識や経験だけでなく、多くの有能な方々にお会いでき、ネットワークが出来たのではないかと、自負しております。

また、8月初めには、兵庫県の齋藤富雄副知事や山中茂樹関西学院大教授らのお力を借りて、念願でありました「災害報道研究会」を立ち上げることができたことも印象深い出来事です。これは、近畿の地方自治体職員の皆さんと、神戸、大阪のテレビ、ラジオ、新聞の記者やデスクの皆さんのが一堂に会しまして、災害報道の課題について話し合おうという、関西では初めての研究会です。これまで2回の会合を持ち、災害対策本部の公開の是非などについて話し合いました。メディアスクラムやヘリコプター取材の問題点など、なかなか特効薬のない難しい問題ばかりですが、マスコミ側と行政側が忌憚なく話し合うことにより、よりよい関係をもてるようになれば、と期待しております。

30歳前後の専任研究員に交じって、50歳になるやや古ぼけた研究員ですが、気持ちだけでも若い心を持って研究生活を続けたいと思っています。ただ、論文作成と、パワーポイントを始めとするパソコン機器に四苦八苦の毎日ではあります。

このセンターに来まして展示をじっくりと見させていただく機会にも恵まれ、あらためて、阪神・淡路大震災の教訓を「伝え、残す」努力が必要だ、と実感しております。年が明け、大震災から11年目を迎えました。私も神戸市灘区の生まれで、震災による「ふるさと」のダメージに心を痛めました。災害列島といわれる日本で、次に予想される災害の被害を少しでも軽減できるように、ほんとうに微力ながら力を発揮できるように勉強を続けていきたいと決意しておりますので、よろしくお願い申し上げます。

河川洪水ハザードマップと 神戸市地震津波減災マップを設置

来館者の防災意識を高め、より親しみやすく展示を見学いただくために、衛星写真やコンピューターグラフィックス（CG）を利用した「兵庫県内主要河川の洪水ハザードマップ」と「神戸市地震津波減災マップ」を設置しました。

これは、（株）神戸製鋼所より同社創立100周年関連事業によるご寄付によるもので、11月28日には、花岡神戸製鋼所業務部長、兵庫県防災企画局長、河田人と防災未来センター長による除幕式を行いました。

両マップは50インチプラズマディスプレイの大型画面上に、予想される被災状況を衛星写真やデジタル地図上に示したもので、タッチパネル方式で拡大・縮小や画面の移動も指一本でどなたにでも自由自在に操作できるものです。

ハザードマップは、衛星写真上に兵庫県内6河川の洪水時の浸水状況を5段階に色分けして表示しています。また地域の主要ポイントではどこまで浸水するか、写真上にCGで表します。

減災マップは神戸市と中央区の地図上に津波避難対象地区とかけ崩れ危険地区を表示し、その地図と衛星写真を重ね合わせて見ることができます。

ぜひ、来館して実際にご覧いただき、最新の技術を活用した防災・減災対策を体感してください。



センターの図録発売中！



人と防災未来センター

- [内容] • 被災写真
- 阪神・淡路大震災の概要
- 地震の科学
- 阪神・淡路大震災の記録と被災者の記憶
- 行政の主な取り組み、復興状況など

A4版・80ページ 定価1,000円

センターミュージアムショップで好評発売中。

お問い合わせ先：078-262-5502 企画営業部

「友の会」会員募集

人と防災未来センター友の会は、センターの活動に協力し、積極的に利用して防災対策の大切さといのちの尊さを学習しようとする人々の親睦を深め、センターと連携しつつ、社会の防災力の向上に寄与することを目的に設立されました。

どなたでも入会できますので、たくさんの方の入会をお待ちしています！



会員特典

1. センターへ無料で入館できます。
2. センターの最新情報が手に入ります。
3. 友の会のイベントに参加できます。

年会費

- | | |
|-------------|-------------------------------|
| 個人会員 | 3,000円 |
| 法人会員 | 一口 50,000円 |
| 郵便振替 | : 00940-2-160211 |
| 口座名 | : 阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター友の会 |

MIRAI

[人と防災未来センターニュース] Vol.17

発行／阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

お問い合わせ先

 **人と防災未来センター**

神戸市中央区臨浜海岸通1-5-2 ☎ 078-261-0073
事務局／TEL.(078)262-5060
観覧案内／TEL.(078)262-5050
ホームページアドレス／<http://www.dri.ne.jp/>

●開館時間 9:30～17:30(入館は16:30まで)
ただし、7～9月は9:30～18:00
(入館は17:00まで)
金・土曜日は19:00(入館は18:00まで)

●休館日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日)
年末年始の12月31日と1月1日
※ゴールデンウィーク(4月28日～5月5日)期間中は無休

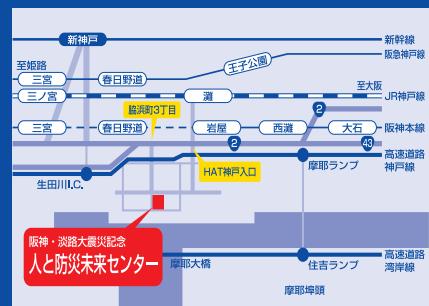
●入館料金(団体は20名以上)

区分	防災未来館		ひと未来館		両館とも	
	個人	団体	個人	団体	個人	団体
大人	500円	400円	500円	400円	800円	640円
高校・大学生	400円	320円	400円	320円	640円	510円
小・中学生	250円	200円	250円	200円	400円	320円

※兵庫県内の小・中学生はココロンカードを提示すれば無料。

障害をお持ちの方及び兵庫県内在住で65歳以上の方は上記の半額。障害者手帳又は年齢・住所のわかるものを提示ください。

交通マップ



■交通 鉄道／阪神「岩屋駅」から徒歩約10分。
JR「灘駅」南口から徒歩約12分。

阪急「王子公園駅」西口から徒歩約20分。
バス／JR・阪神・阪急・神戸市営地下鉄「三宮駅」

から約15分。
神戸市営バス

三宮駅前から約1時間間隔で運転。
阪神電鉄バス

三宮駅前から約30分間隔で運転。

車／阪神高速神戸線「生田川ランプ」から約8分、
阪神高速神戸線「摩耶ランプ」から約4分、
阪急・阪神・JR「三宮駅」から約10分。

■駐車場 有料駐車場(普通車100台駐車可能)このほか
近隣にも有料駐車場があります。

■バス待機所

予約制／無料
観覧予約時に待機所利用のご予約をお願いします。

ご意見・ご感想は事務局まで。

平成18年3月発行